

大宰府条坊跡第 306 次調査現場説明会資料



平成 26 年 11 月 2 日

太宰府市教育委員会文化財課

調査地：太宰府市五条 1 丁目

◎確認された遺構

【柵列もしくは掘立柱建物 A】

東西 2 間分確認でき、検出長 3.81m、柱間が 1.93m と 1.88m。柱痕が確認でき、柱径は約 17cm です。南側調査区外に続く可能性も考えられます。平安後期以降。

【柵列もしくは掘立柱建物 B】

東西 3 間分確認でき、検出長 7m、柱間が 2.3m。柱痕が確認でき、柱径は約 10cm です。南側調査区外に続く可能性も考えられます。平安後期以降。

【井戸 C】

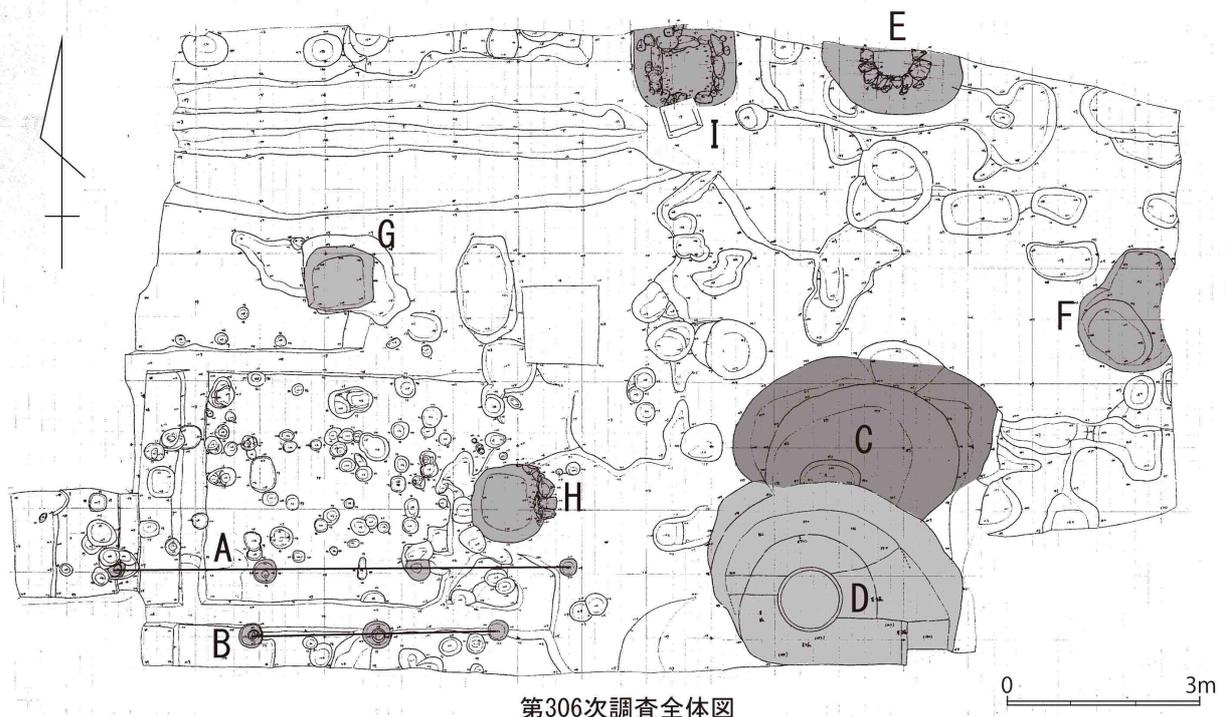
東西 4.0m、南北 2m 以上、深さ 3m で、若干楕円形をした掘り方で、南側半分は井戸 D に壊されています。深さ 2.7m の掘り方中央付近で径 0.9m、深さ 0.35m の円形の掘り込みが検出され、井戸枠は桶を使用して作られた可能性が考えられます。12 世紀後半～13 世紀代に埋められています。

【井戸 D】

東西 3.9m、南北 3.1m 以上、深さ 2.45m の円形の掘り方で、中央付近は現在の井戸によって破壊され、井戸枠などは全く確認できませんでした。形状や深さから井戸だったと考えられ、13 世紀後半～14 世紀前半頃に埋められたと推測されます。

【井戸 E】

掘り方は東西約 2.15m で、井戸枠は径 0.6m、深さ 0.85m 以上の円形石組み井戸。石積みは花崗岩の河原石を積んでいます。最終埋没は昭和 40 年代以降と推測されます。



第306次調査全体図

【土坑 F】

2m×1.2m、深さ0.9mの楕円形の穴です。埋土には若干炭が混じっていて、底面近くには橙黄色粘土が厚さ5cm程堆積しており、土壁やカマドなどの残骸を捨てた可能性もあります。11世紀後半頃に埋まったもので、今回の調査で確認された最も古い遺構です。

【土坑 G】

1m四方、深さ1mの方形の穴です。埋まっていた土は、底面近くが綺麗な砂で、その砂を除去するとやや黄色のフサフサした有機質が10cm前後堆積していました。

イモ類を貯蔵する方法として、地下に穴を掘り、もみ殻を敷きイモを地面に設置させないようにして保管するようなことが行われており、フサフサした有機質はもみ殻が腐ったものであり、この遺構は地下貯蔵庫と推測されます。江戸時代以降のもの。

【土坑 H】

東西1.1m、南北1.2m、深さ1.1mの方形の穴で、東側に石積みが見られます。地下貯蔵庫の可能性が考えられます。

【土坑 I】

内法約0.8m四方、深さ約0.6mの方形石積み遺構で、深さから井戸とは考えられず、地下貯蔵庫の可能性が考えられます。

◎出土遺物

平安時代後期から現代にまでの輸入陶磁器、土師器などが出土しました。天保通宝(1835年～明治)が1点出土しています。ここからは平安時代後期より古い遺物は出土していませんが、周辺の調査では平安時代の井戸や中世の鑄造関連の遺物も見つかっています。

◎まとめ

五条の町並みは、江戸時代後期の「太宰府旧蹟全図」「博多太宰府図屏風」にも描かれ、遅くとも江戸時代には現在のような地割になっていたと推測されます。特に「博多太宰府図屏風」に描かれた藁葺き民家が建ち並ぶ風景は、昭和30年代まで残されており、イモを貯蔵していたとみられる地下貯蔵庫は、その頃の生活の知恵を発掘調査から知ることができた貴重な発見でした。

井戸が道路より離れた位置で見つかったことは、鎌倉時代には現在と同じ位置に道路があり、それに面して建物が建ち、その裏手に井戸が設けられた風景が想像できます。かつて五条は酒造屋があっただくらい湧水豊かな地質だったのですが、発掘された井戸からの湧水はなく、地下水位が下がったことを物語っています。

周辺でも同じような遺構が眠っているものと考えられます。